

体験版

# 聖母と隷母

鮎川 かほる

恵子と同じクリームを肉棒に塗られた息子の雅史は、美由紀の指によってもたらされたその快楽に呻く。痒みが一気に和らぎ、敏感になった皮膚は全ての刺激が快楽となって感じられるのだ。恵子は、雅史の固くなった肉棒で痒くてたまらない膣穴をかきまわされることに最後に残ったわずかな理性で拒否を示した。

美由紀は握った肉棒を恵子の膣口に当てた。それが恵子のわずかな理性を打ち砕いた。母息子の相姦性交さえもこの痒みから解放されるためには、拒否できないところまで追い込まれていたのだ。

「あああ、もうだめ…がまんできない…ま、雅史…入れて…入れて欲しいの…ああ…ママ…また墮ちてしま  
うわ……」

しくしく泣きながら恵子はどうとう挿入を願った。美由紀が握った雅史の肉棒を軽く揺すって、さらに膣口に刺激を与える。美母も美少年もうめき声を上げる。美由紀が恵子に耳打ちした。恵子は我慢できないといった感じですぐに首を縦に振る。

「雅史…ママの中に入れてください。」

「どうとう、おねだりしちゃったね」

絵美が笑った。

「雅史、じゃあ、ママのおまんこでセックスしなさい！」

美由紀が全裸の雅史の臀部を叩いた。雅史は解き放たれた猛獣のごとく、恵子に挑みかかった。雅史の固く勃起した肉棒はすでに恵子の膣口にあてがわれており、雅史が腰を突き出すとそれは実にスムーズに母の膣内におさまっていく。雅史が呻く。甘美な妖しい快感で呻くのだ。

たまらない痒みは母の膣粘膜で擦られて一気に快感となる。実に気持ちよいのだ。こすればこするほど快感が引き出され、涙さえ出そうになる。雅史は吠えながら、腰を前後に激しく使った。子宮口にまで届く抽送だ。突き上げればすぐに引き出し、またずんと膣奥に埋める。一方、実の息子のペニスで貫かれている恵子にも、快感の波が押しよせている。膣粘膜を襲っている耐え難い痛痒感が固い肉棒で突かれ、こすられ、かきまわされるほどに、快感へと変わっていくのだ。もっと激しく突いてほしかった。もっとこすって欲しかった。もっと深く、乱暴に…

息子との近親性交をしている罪悪感は、今の恵子にはない。無数の蟻が群がるような痒みから開放してくれる肉棒の刺激を、自分も腰を使って求めているひとりの女にすぎなかった。女というより、今の恵子は牝であった。快楽をどん欲に求める牝であった。雅史の腰にあわせて、恵子も緊縛されて身動きできないのだが、それでも腰を動かしている。

椅子がギシギシときしんでいる。雅史の体重が恵子の股間にのし掛かってくる。雅史の身体を両手が自由になるのならばしがみつき、深い挿入を求めたかった。もっと激しい刺激を身体が求めてしまう。

「あああ…いい…いいの…」

「ママ…いく…いくよ…でちゃう…」

雅史の腰使いが一団と激しくなった。ぬちゃっぬちゃっど湿った音が恵子と雅史の結合部分から聞こえている。

「待て！」

美由紀が声をかけた。雅史はその意味を身体に染みこまされている。自慰をさせられているときでも射精間近になって美由紀が

「待て！」

と命令する。雅史は手の動きを止めて、まるで飼いならされた犬のように「待て」の姿勢になるのだ。排尿時にも「待て！」と言われる。雅史は動きを止める。

いよいよ射精をまじかに迎えようとしていた。腰を激し

く使ってさらに深い快楽を求めていた。その動きがぴたっと止まる。恵子が鼻を鳴らしてすねた声を出す。

「いやよ。雅史さん。もっとママを泣かせて・・・お願いよ・・・」

しかし雅史の腰はじっとしている。母の膣穴に挿入したまま動く気配はない。それは雅史にとっても辛い時間である。射精間近であった雅史にとって、ぬめあたたかい膣内に挿入したまま動けないでいるのは拷問であった。しかも痛痒感は動きを止めるとふたたび襲ってくるのだ。

「よし！」

美由紀は笑いながら雅史の臀部を叩いた。雅史ははじかれたように腰の動きを再開した。

絵美も沙也加も笑いながら

「待て！」

を思い思いに命じた。そのたびに恵子はすすり泣いた。悶えながらすすり泣くのであった。何度も少女たちに「待て！」を強要されながらも、雅史は腰を激しく使い、とう

とう射精の瞬間がきた。雅史はひときわ深く挿入し、腰の動きを止めた。射精の瞬間を少女たちがスマホで撮影する。雅史の射精とあわせるように恵子も絶頂を迎えた。美熟女の動物的な壮絶な絶頂だった。

催淫クリームの影響で、恵子の性感は高ぶりに高ぶっている。粘膜は敏感になっており、雅史の肉棒が挿入されただけで軽くアクメを迎えていた恵子は、射精にあわせて深く激しく登りつめていた。首筋に生汗が光っている。呼吸は荒く乳房が上下し、乳首は固くしこったままだ。

「とうとう中出ししちゃったね」

「恵子も同時にいったみたいね。親子で激しいセックスだわ、ハハハハ」

「でもこの薬を使うとこれからが本番なのよね」

「アナルセックスさせたときも結局四時間以上もつながったままだったからね。今日も、まだまだ五回以上は射精できるよね」

「さあ、恵子も雅史もがんばるのよ。雅史のおちんちん、

もう元気になっているんじゃない？」

絵美が結合部分を覗き込む。

「やっぱり、もう固くなっているわ」

痛痒感とともに、射精しても快楽は増す一方で、血液はペニスにどんどん流入するのだ。

それだけ心臓にかかる負担は大きいのだが、継続力は飛躍的に伸びる媚薬である。若い雅史にとっては、もともと継続力はあるのだから、媚薬の影響で射精しても勃起はおさまらず、母の膣穴に射精した直後から勃起をさせてとどまっている。

こすらなければ、狂いそうになるほど、肉棒はじんじんと熱くそして疼きがおさまらない。射精直後におさまりにかけていた痛痒感はさらに増してくる。恵子の膣粘膜でこすられた肉棒は、さらに神経をむきだしにされているほどに敏感な感覚になっているのだ。雅史はすぐに激しく腰を使い始めた。恵子も悲鳴をあげながら雅史を求めている。

「ああああっ…いい…雅史…いいの…もっと…もっ

と深くお願い・・・激しくついて・・・ママをめちゃくちゃにし  
て・・・ママをもっと泣かせてください・・・あああ・・・いい・  
・いっちゃん・・・ママ・・・またいっちゃんわ・・・ごめんなさ  
い・・・ママ、淫らになるわ・・・」